長岡京跡右京第966次発掘調査報告

２００９

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

序　　文

長岡京市では「住みつづけたい　みどりと歴史のまち　長岡京」をめざして街づくりに取り組んでおります。

みどりと歴史、街との調和を保ちながら、より住みよい環境を整えていくために、発掘調査によってより詳細な歴史資料を明らかにすることが私どもに課せられた使命であります。

ここに報告する調査は、本年度から始まった「長岡京市公立学校施設整備計画」のうち、長岡第二中学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査です。

当地域は長岡京跡をはじめ、今里遺跡、乙訓寺、今里城跡などが所在する、市内でも有数の遺跡密集地域であります。今回の調査でも、古墳時代の竪穴住居など複数の時代の遺構・遺物が確認され、遺跡の復原に欠かせない重要な成果を得ることができました。

これらの成果をさらに周辺での資料と合わせて総合的に研究し、市民のみなさんに公開していくことで、これからの街づくりに貢献していきたいと願っております。

最後になりましたが、現地調査から整理作業に至るまで、さまざまなご指導・ご協力いただきました関係各機関、関係者の皆様に厚くお礼申し上げるとともに、今後なお一層のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成21年9月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
理事長　　芦　田　富　男

凡　　例

1．本書は、長岡京市立長岡第二中学校の体育館改築に伴い、平成21（2009）年４月１日から７月９日まで、京都府長岡京市今里五丁目20-1で実施した発掘調査成果の概要報告である。調査面積は、約435㎡である。

2．調査は、長岡京市の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査の内、第１トレンチを、同センター事務局長小田桐淳が担当し、第２～４トレンチの調査と整理作業は、同センター調査係総括主査岩崎　誠が担当した。

3．長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。

4．長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第４号の復原に従った。

5．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

6．本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。

7．本書において使用している各遺構固有名称は、長岡京跡に関する調査として、遺構記号＋調査次数＋遺構番号としているが、各遺構の固有名称が長くなり、本文や図面に表現しにくいため、ここでは調査次数を省略している。

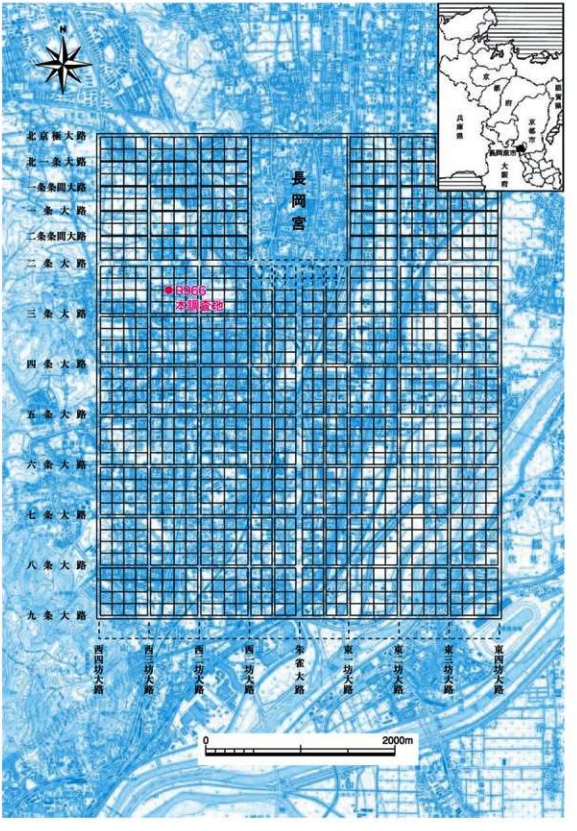
8．本書で使用している平面座標は、旧国土座標第Ⅵ系によっている。

9．本書で用いた土層の色調は、「新版標準土色帖」1998年版を参考にした。

10．現地での実測作業と、遺物の洗浄・実測、および本書掲載の挿図作成は、岩崎の指示の基、主に（株）文化財サービスがおこなった。

11．本書の執筆・編集は岩崎が担当した。

＊表紙　第３トレンチ川ＳＤ01上層出土キセル吸口部の装飾拓影模式図



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本 文 目 次

序　文 …… i
凡　例 …… ii

1　調査経過 …… 1
2　第1トレンチの調査 …… 3
　（1）土層 …… 3
3　第2トレンチの調査 …… 3
　（1）土層 …… 3
　（2）検出遺構 …… 5
4　第3トレンチの調査 …… 5
　（1）土層 …… 5
　（2）検出遺構 …… 5
5　第4トレンチの調査 …… 10
　（1）土層 …… 10
　（2）検出遺構 …… 10
6　出土遺物 …… 12
　（1）近世の遺物 …… 12
　（2）鎌倉時代の遺物 …… 13
　（3）平安時代の遺物 …… 13
　（4）古墳時代の遺物 …… 14
　（5）弥生時代の遺物 …… 14
7　ま と め …… 14

図　版　目　次

図版　1　（1）　調査区全景（南西から）
（2）　調査区全景（南東から）
図版　2　（1）　調査区全景（北西から）
（2）　第１トレンチ全景（南から）
図版　3　（1）　第２トレンチ全景（北西から）
（2）　第２トレンチ全景（南から）
図版　4　（1）　第３トレンチ全景（北東から）
（2）　第３トレンチ全景（北西から）
図版　5　（1）　第３トレンチ検出川ＳＤ01と柱穴群（南東から）
（2）　第３トレンチ検出川ＳＤ01（東から）
図版　6　（1）　第３トレンチ検出溝ＳＤ03（南西から）
（2）　第３トレンチ検出溝ＳＤ03および東柱穴群（南から）
図版　7　（1）　第３トレンチ西端部の柱穴群（南東から）
（2）　第４トレンチ南部検出の竪穴住居ＳＨ05（西から）
図版　8　（1）　第４トレンチ全景（北から）
（2）　第４トレンチ全景（南西から）
図版　9　（1）　第４トレンチ検出川ＳＤ01（北西から）
（2）　第４トレンチ中央部検出の竪穴住居ＳＨ06（西から）
図版　10　（1）　竪穴住居ＳＨ06カマド（北から）
（2）　竪穴住居ＳＨ06カマド（南から）
図版　11　（1）　第３トレンチ調査風景（西から）
（2）　出土遺物

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1
第３図　調査区配置図（1/250）…… 2
第４図　第１トレンチ実測図（1/100）…… 3
第５図　第２トレンチ土層図（1/50）…… 4
第６図　川ＳＤ01土層図（1/50）…… 6
第７図　第３トレンチ遺構集中地区実測図（1/100）…… 6
第８図　第３トレンチ土層図（1/50）…… 7
第９図　溝ＳＤ03集石実測図（1/20）…… 8
第10図　第４トレンチ遺構配置図（1/100）…… 9
第11図　第４トレンチ土層図（1/50）…… 10
第12図　竪穴住居ＳＨ05実測図（1/25）…… 11
第13図　竪穴住居ＳＨ06実測図（1/25）…… 12
第14図　キセル写真 …… 13
第15図　出土遺物実測図（1/4）…… 13

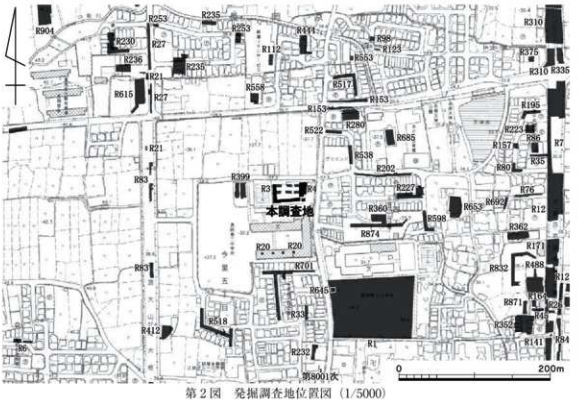
付　表　目　次

付表　　報告書抄録

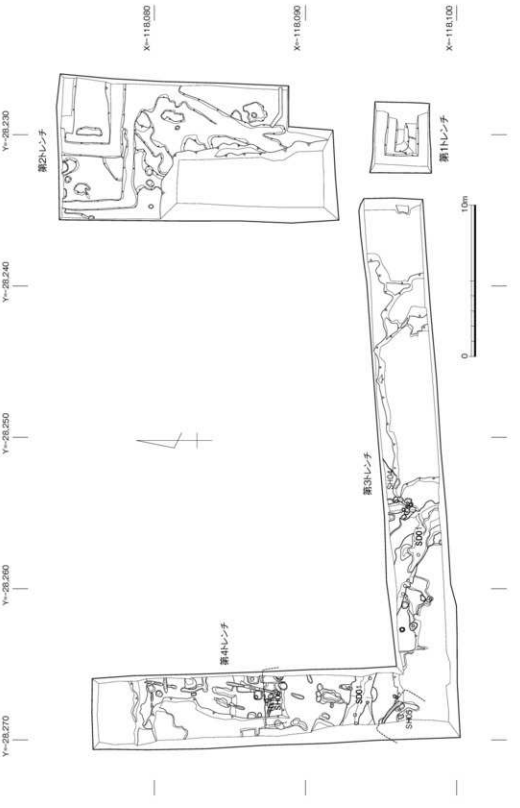
1　調査経過

当調査地は、阪急長岡天神駅の北西約1500mに位置する。地表面標高は、約37.1mで、立地は、低位段丘Ⅰにある。現状は、長岡京市立長岡第二中学校の校内で、体育館のところである。調査は、既存体育館解体前に第１トレンチの調査を実施し、第２～４トレンチは、既存施設解体整地後に実施した。

当調査位置は、長岡京跡右京三条三坊十一町の推定位置に当たるほか、旧石器時代から現代に至るまでの各時代に関連する今里遺跡と井ノ内遺跡の重複地でもある。長岡京の推定同一宅地内では、推定十一町宅地北辺部で、長岡京跡右京第３・４次調査が、既存体育館建設に伴い、昭和47年に同施設北半部で行われ[1]、また、南半部では、当中学校南校舎増築工事に伴って右京第20次調査[2]として実施、さらに、南辺部では中学校の南隣接地の宅地開発に伴う右京第701次調査を実施している。これらの調査では、長岡京跡に関係する明確な遺構は検出されていないが、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土し、右京第701次調査では、古墳時代の竪穴住居群を検出[3]している。長岡京の条坊復原では、西隣の十四町推定地では、当中学校柔剛道場新設に伴う右京第399次調査が実施され、同宅地内の施設と考えられる長岡京期の掘立柱の柵と推定されている遺構などが検出されている。長岡京期以前の遺構では、弥生時代の溝をはじめ、古墳時代後期の竪穴住居や合わせ口土器棺墓などが検出されている[4]。また、当調査地の南東約20mの所では、昭和41年に右京第１次調査が実施され、現在する郡名寺院「乙訓寺」の講堂などが検出されてい



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）



第3図　調査区配置図（1/250）

る[5]（第２図）。このように、当調査地は、長岡京跡をはじめ、各時代の遺跡が重複しており、また乙訓寺関連についても着目される位置にある。

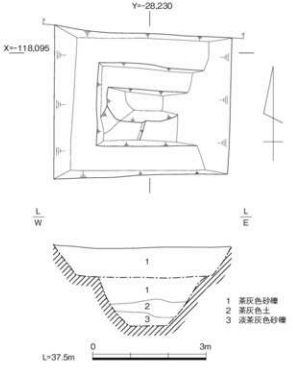
当調査は、既存体育館解体前に第１トレンチの調査を４月１日から２日までおこない、この成果を基に、既存施設解体後に、右京第３・４次調査が実施された北半部を避けて、南半部を中心に、５月28日から第２～４トレンチの調査に移行した（第３図、図版１・２（１））。以下、トレンチごとに概要を報告する。

2　第１トレンチの調査

第１トレンチは、既存体育館の南東隅接位置に設定した。

（１）土層

第１トレンチでは、既存体育館設置の際か、または当中学校建設に伴う造成攪乱層が厚く見られ、遺構・遺物は見られず、遺跡の残存状況を探る手掛かりは得られなかった（第４図、図版２（２））。しかし、攪乱層のほとんどは砂礫層であり、周辺部の基盤層が砂礫層で構成されているであろうことは予測できた。この砂礫層堆積は、当調査区の調査段階では、段丘を削りこんだ開析谷を当中学校建設時の整地造成時に埋めたものと判断されていたが、第２・３トレンチの調査が進行するに伴い、低位段丘堆積の砂礫層が攪拌された攪乱造成土であることが分かった。



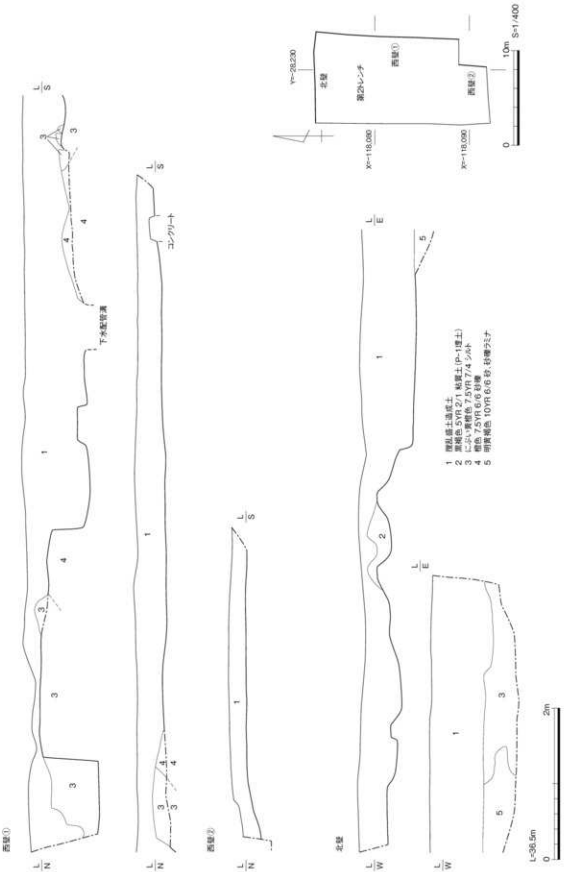
第４図　第１トレンチ実測図（1/100）

3　第２トレンチの調査

既存体育館解体跡地の東辺部に設定した東調査区である。調査区の北東部には、用務員家屋の跡地の一部がかかる。

（１）土層

調査区全体を攪乱造成土が覆い、埋設管施設や建物基礎などで各所に攪乱坑がみられた（第５図、図版３）。特に当調査区の南西部には、南北約10m以上、東西約５m以上、深さ約２m以上の攪乱坑がある。第１トレンチは、このような攪乱坑にあたっていた可能性がある。当調査区北辺部には、黄橙色系のシルト層が厚く堆積し、南部には黄色から橙色系の砂礫堆積が厚く認められた。このシルトと砂礫堆積が、遺構検出の基盤層を構成する無遺物層で、段丘堆積



第5図　第2トレンチ土層図（1/50）

層と考えられる。当調査区北端部や西辺部の一部では、深さ約10cmで基盤シルト層に達する箇所がある。このようなことから、当調査区全体に、盛土造成ではなく、切り土造成がなされていることが明らかになった。

（2）検出遺構

当調査区の土層状況で見たように、激しい撹乱と削平を受けていたため、当中学校関連施設の基礎解体坑や埋設管の掘り込みがほとんどであった。しかし、北辺部で、黒褐色系粘質土を埋土とする柱穴状掘り込みＰ－１を検出した。直径約80cm、深さ約30cmの残存状況で、平面は楕円形に近い掘形の遺構である。埋土からの出土遺物はなく、時期は確定できなかったが、周辺部の調査で検出されている遺構埋土の特徴との比較から、古墳時代以前の所産と考えられる。検出面標高は約36.5mである。

4　第３トレンチの調査

当調査区は、体育館解体跡の南辺部に設定した調査区である。第１トレンチの西側に位置し、幅約４m、長さ約30mの東西方向に長い調査区である。

（1）土層

当調査区は、第１・２トレンチに近い位置では、大きく掘り込まれて撹乱を受けており、またこの撹乱坑は、当調査区の南部を東西に貫いていた。しかし、当調査区北辺部には、当中学校新設時の造成直前まであった水田耕作土や竹藪客土が観察できる部分もあり、残存状況は良い。遺構検出基盤層は、当調査区の東端から約50m西の位置で標高約36.4m（現地表下約40cm）で、削平を受けていた第２トレンチとほぼ同じである。この面は、東端から約13mあたりからなだらかに西方向へ降り、当調査区西端近くでは、標高約35.7mになる。また第１・２トレンチの基盤となる砂礫堆積は、当調査区の東半部にも広がりを見せるが、西への傾斜地の途中、つまり当調査区の東端から約15m付近でシルトまたは粘土層に変わる。この基盤層が変わるシルト層側に、当中学校新設直前まで機能していた蓮ヶ糸川（川ＳＤ01）を検出した。この川は、当調査地の北西約200mにあった重箱池から引かれた農業用水路として、近年まで重要な役割を果たしていた。この川の埋め土を除去した段階で、長岡京期前後の時期と考えられる柱穴群や、古墳時代の住居跡と考えられる落ち込みなどを検出した。

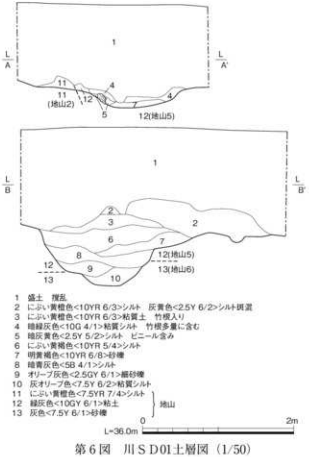
（2）検出遺構

検出遺構には、先述した川の他、近代の溝、長岡京期前後の柱穴群、古墳時代の住居跡と思われる落ち込みなどがある（第７図、図版４）。そのほとんどは、基盤層を構成する２種類（砂礫層とシルト層）の土層の内、標高約36m以下のシルト層上面で検出した。

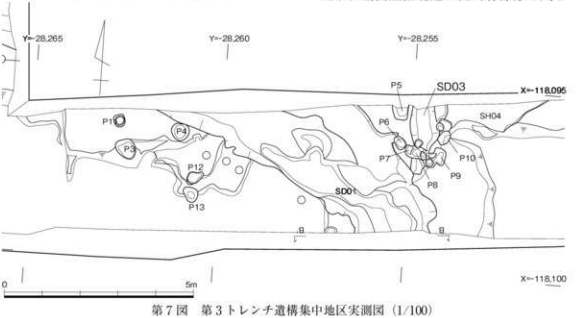
［近代遺構］

当中学校新設に伴う整地造成工事で埋没した遺構群である。先述した蓮ヶ糸川（川ＳＤ01）の一部の他、地境溝かと考えられる集石溝ＳＤ03などがある。

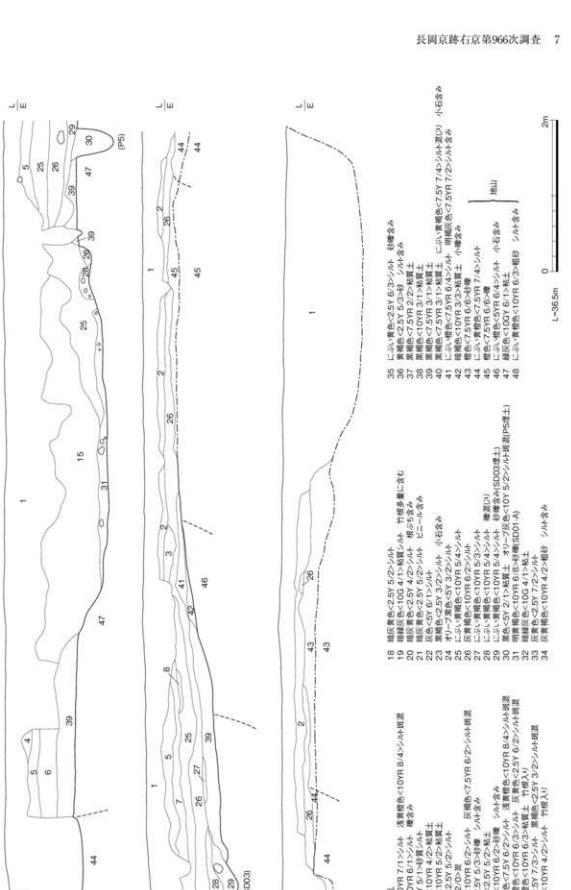
川ＳＤ01（第６図、図版５）は、北西から南東方向にあり、調査区南辺では南へ屈曲し始める。幅約2.5m、深さ約１ｍで、川底は南に傾斜する。川底には、薄い砂または砂礫堆積があり、流水を裏付けている（第６図７層）。この最下層に見られる砂礫堆積からは、信楽の擂鉢や、染付・瀬戸・唐津などの陶磁器碗皿類などが出土し、江戸時代以後の堆積と考えられる。また、調査区南辺の南方への屈曲部分には、川底の土坑状浸食が見られ、そこには川底堆積の砂礫層より古いシルトと砂礫の互層堆積が見られた（同図８～10層）。このへこみに堆積した土層からは、布目のある平瓦や須恵器の他、弥生後期の土器なども出土した。当調査区北壁断面図の第８図15層は第６図３層にあたり、竹の地下茎などが攪拌された状態で含まれていた。従って、この土層は整地の際に埋められた土層と考えられる。大正11年の地図にも表現があり、この川より東（左岸）は竹藪、西（右岸）は水田の表現がされている。この地図から読む限り、遺構検出基盤層が砂礫層の地域を竹藪、シルト層の地域を水田として利用し、その境に流れる小川を制御して、この蓮ヶ糸川として用水利用したものと考えられる。



第６図　川ＳＤ01土層図（1/50）



第７図　第３トレンチ遺構集中地区実測図（1/100）



第8図　第3トレンチ土層図（1/50）

よく、丸太杭で横板を固定した側板による護岸施設が残存していた。

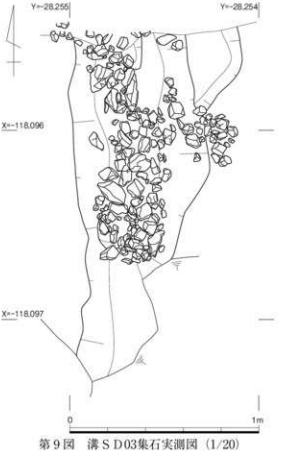
溝ＳＤ03（第９図、図版６）は、幅約23㎝、深さ約25㎝の南北方向に掘られた溝で、溝内には拳大前後の亜角礫が詰められていた。南部は攪乱により削平を受けていたが、本来蓮ヶ糸川ＳＤ01に接続するものと思われる。川ＳＤ01が北西から南東方向にあるのに対し、この溝ＳＤ03はほぼ南北方向にあることから、川ＳＤ01の左岸にあった竹藪の地境溝である可能性が考えられる。溝内の集積礫は、竹藪の手入れの際に藪内から取り除かれたものか、あるいは、水抜きの暗渠としての機能が考えられる。

［鎌倉時代の遺構］

鎌倉時代の遺構には、平面円形の掘形をもつ柱穴群がある（図版６（２）・７（１））。川ＳＤ01の右岸域には柱穴Ｐ－４とＰ－11（図版７（１））があり、左岸域には柱穴Ｐ－７～10など（図版６（２））がある。ほとんどは直径約30㎝の円形掘形で、大きいものには、直径約50㎝を測るもの（Ｐ－４など）もある。柱穴からの出土遺物はほとんど無く、時期を決めがたいが、近世包含層から出土する瓦器椀などから、13世紀代の所産と考えられる。

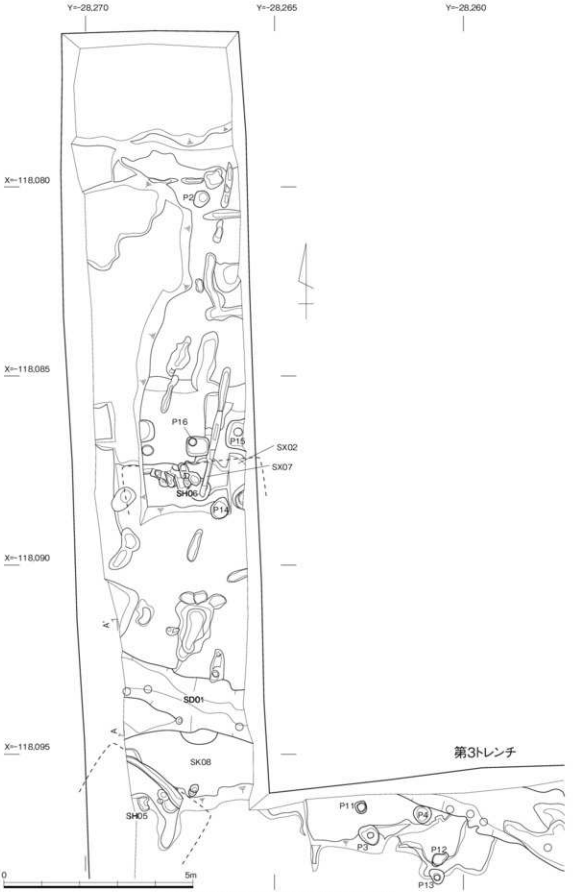
［平安時代の遺構］

平安時代の遺構には、長岡京期前後の柱穴群（図版６（２）・７（１））がある。いずれも隅円方形の掘形で、各辺がほぼ南北または東西方向にあることから、長岡京期前後の所産と考えられる。出土遺物に乏しいため、時期を確定しかねるが、川ＳＤ01下層などから長岡京期の遺物が出土していることから、長岡京期の可能性が考えられる。検出位置は、鎌倉時代の所産と考えた柱穴群と重なり、川ＳＤ01の右岸域からは、Ｐ－３・12・13が、左岸域からはＰ－５・６を検出した。これらの中で、柱穴Ｐ－３・13には、埋土の違いにより、直径約20㎝の柱痕を分層する事ができた。これら柱穴の検出面が、造成時に削平を受けていない柱穴Ｐ－５の掘削深度は約30㎝あり、柱穴掘形北辺の残存状況が良かった柱穴Ｐ－３も、深さ約30㎝ある。このことから、本来は少なくともそれ以上の深さまで掘られていたものと考えられる。



第９図　溝ＳＤ03集石実測図（1/20）

これらの柱穴群は、造成時の攪乱や川ＳＤ01などの削平により、柵や建物としてのまとまりとして捉えることはできなかった。しかし、当調査地において、宅地としての土地利用があったことを知ることができる、貴重な遺構群であると言える。



第10図 第４トレンチ遺構配置図（1/100）

5　第４トレンチの調査

体育館跡地西辺に設定した調査区である。南端は第３トレンチ西端に接続し、幅約５ｍで北に約25ｍの範囲を調査した。

（１）土層

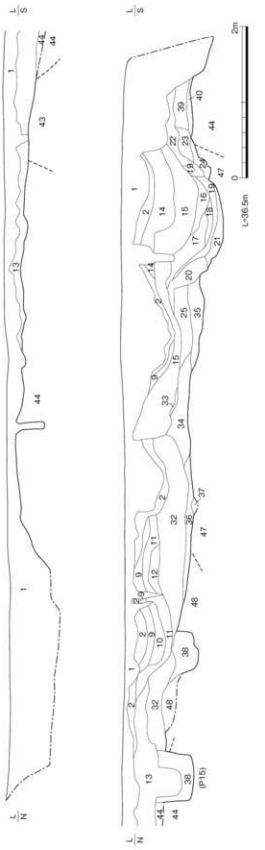
当調査区は、南端部に第３トレンチから続く大規模な攪乱坑があり、北端部と西辺部も深く掘り込む攪乱坑があったが、今回の調査トレンチの中で、最も残存状況が良かった。当調査区の基盤層は、北から南に傾斜している。実数で見ると、調査区北端から約５ｍ南の位置で、標高約36.65ｍと最も高く、南端から約４ｍの位置では、標高約35.85ｍにまで降る。第11図１層は、既存施設解体後の整地攪乱層、２～19層は、当中学校新設時の整地層、20～24層は、第３トレンチで検出した蓮ヶ糸川の堆積、25層は、同川北岸の護岸整地層、32～36層は、平面図に表現しなかったが、当調査区東辺に北東から南西方向の近世溝があり、その埋土である。第11図の土層図に表現できなかったが、当調査区で検出した蓮ヶ糸川ＳＤ01（第10図）北岸から北約４ｍまでの範囲に、中世包含層の堆積が見られた。この土層は、南に厚く、包含層南端部では厚さ約20㎝を越えた。中世包含層が、基盤層の傾斜に沿って見られる状況から、当地域の整地が包含層の時期、おそらく13世紀頃から始まったと考えられる。

（２）検出遺構

当調査区で検出できた遺構には、近代の川の他、鎌倉時代の包含層、長岡京期前後の柱穴、古墳時代の住居跡などがある（第11図、図版８）。

［近代遺構］

川ＳＤ01（図版９（１））は、第３トレンチで検出した蓮ヶ糸川の上流の一部である。川上の当調査区西辺にあたる部分では、幅約1.1ｍ、深さ70㎝で細く、



第11図　第４トレンチ土層図（1/50）

下流に向かって幅が増し、当調査区東辺では、幅約1.5m、深さ約70cmとなる。これが、さらに下流の第３トレンチでは、先述したように、幅約2.5m、深さ約１mと、さらに大規模になる。

［鎌倉時代の遺構］

鎌倉時代に関しては、明確な遺構は見られなかったが、一部に残る包含層から、土師器皿や瓦器椀の小片が出土した。

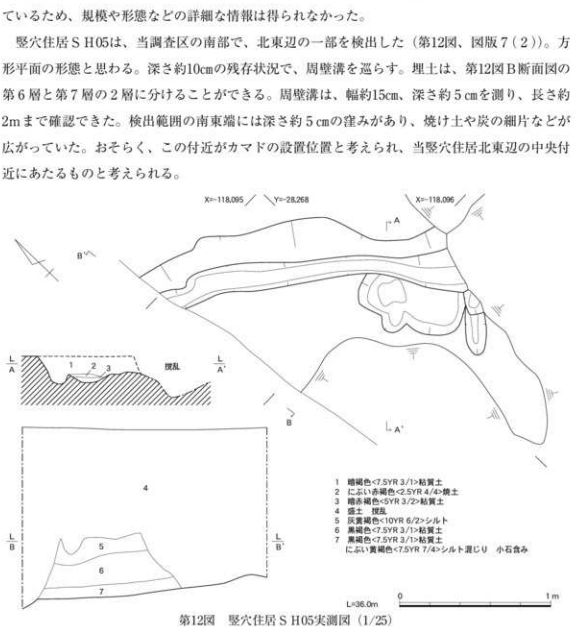
［平安時代の遺構］

当調査区からは、第３トレンチ検出の柱穴群と共通する特徴のある柱穴が検出できた（Ｐ－２・14～16）。いずれも隅円方形の掘形である。時期を確定する遺物の出土はなかったが、長岡京期前後の所産と考えられる。

［古墳時代の遺構］

古墳時代の遺構には、２基の竪穴住居と考えられる遺構がある。いずれも、激しい攪乱を受けているため、規模や形態などの詳細な情報は得られなかった。

竪穴住居ＳＨ05は、当調査区の南部で、北東辺の一部を検出した（第12図、図版７（２））。方形平面の形態と思わる。深さ約10cmの残存状況で、周壁溝を巡らす。埋土は、第12図Ｂ断面図の第６層と第７層の２層に分けることができる。周壁溝は、幅約15cm、深さ約５cmを測り、長さ約2mまで確認できた。検出範囲の南東端には深さ約５cmの窪みがあり、焼け土や炭の細片などが広がっていた。おそらく、この付近がカマドの設置位置と考えられ、当竪穴住居北東辺の中央付近にあたるものと考えられる。



第12図　竪穴住居ＳＨ05実測図（1/25）

竪穴住居ＳＨ06は、当調査区のほぼ中央から、ほぼ東西方向の北辺部の一部を検出した（第13図、図版９（２）・10）。西側は、既存施設解体時の攪乱で、東側は近世溝で攪乱を受けている。南部は中世包含層堆積があることから、中世開墾による削平と考えられる。深さは約20㎝の残存状況で、幅約25㎝、深さ約10㎝の周壁溝が巡る。当住居検出範囲の東半部には焼け土面があり、カマド設置位置と考えられる。この焼け土の北端部には、焼け土に覆われるように土師器甕が散乱しており、この土師器甕が支脚として設置されていたものと考えられる。

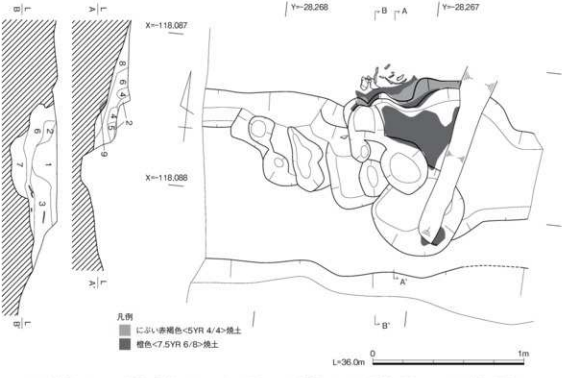
6　出土遺物

出土遺物（第14・15図、図版11（２））には、近世の遺物、中世集落または乙訓寺関連の鎌倉時代や平安時代の遺物、古墳時代後期集落遺跡に関わる遺物、弥生時代集落遺跡に関わる遺物などがある。

（１）近世の遺物

近世の遺物には、平瓦や陶磁器、土師器、金属製品などがある（18～22）。

18は近世灰釉陶器碗の底部と思われる。釉は内面に厚くかかり、灰オリーブ色に発色し、細かい貫入が走る。高台は削り出しで、畳付け面は非常に細い。第４トレンチ川ＳＤ01から出土した。19は唐津皿の底部片で、蛇ノ目高台をもつ。釉薬は薄い灰黄色に発色し、内面にトチンの胎土目



1　にぶい黄褐色<10YR 5/4>粘質土　褐灰色<10YR 5/1>シルト斑混
2　にぶい赤褐色<5YR 4/4>焼土
3　暗褐色<10YR 3/3>粘質土　褐灰色10YR 5/1>シルト斑混
4　橙色<7.5YR 6/8>焼土
5　黒褐色<10YR 2/3>粘質土　橙色<7.5YR6/8>焼土混じり
6　黒褐色<10YR 2/3>粘質土　橙色<7.5YR 6/8>焼土　炭混じり
7　灰黄褐色<10YR 5/2>シルト　黒褐色<10YR 2/3>粘質土　細砂混じり
8　黄褐色<2.5Y 5/4>砂質土
9　にぶい褐色<7.5YR 5/4>焼土

第13図　竪穴住居ＳＨ06実測図（1/25）

がある。第３トレンチ川ＳＤ01底面の砂礫層から出土した。20は土師器皿で、口縁部に油煙が付着する。口径約9.2㎝、器高約1.8㎝に復原できる。やや赤みかかった灰黄色で、17世紀の所産と考えられる。第４トレンチ川ＳＤ01から出土した。21と22は銅製キセルである（第14図）。22の筒部には瓢箪が実るツルが彫り込まれ、吸口部周辺には金色のメッキが残る。川ＳＤ01上層から出土した。21は雁首の先端部を欠くもので、第３トレンチ西端部、川ＳＤ01付近から出土した。

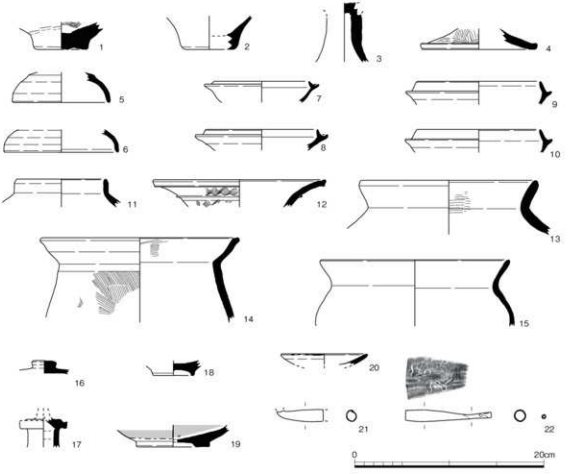
（２）鎌倉時代の遺物

鎌倉時代の遺物には、土師器皿や瓦器椀がある。ほとんどは第４トレンチ中世包含層から出土したが、細片で図化できるものはなかった。瓦器の口縁部などの特徴から、13世紀代のものが大半と思われる。

（３）平安時代の遺物

平安時代の遺物には、長岡京期前後の須恵器や土師器が、柱穴Ｐ２・Ｐ14～16などから出土した。また第３トレンチ川ＳＤ01堆積層にも含まれており、16

第14図　キセル写真



第15図　出土遺物実測図（1/4）

の土師器蓋などが出土した。17は、第４トレンチ川ＳＤ01から出土した浄瓶の破片である。上面に灰緑色の灰釉が厚くかかる。また中世包含層などから、10世紀頃の平安時代須恵器・土師器などが少量出土した。

（４）古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、竪穴住居から出土したものの他、地表面整地層までの各層に包含されていたが、図化できたものは僅かである。竪穴住居ＳＨ05からは、９の須恵器杯身や、13の土師器甕などが出土した。13はカマド付近からの出土である。竪穴住居ＳＨ06カマドからは、14・15の土師器甕が出土した。この他、川ＳＤ01からは、５・６の須恵器杯蓋、８の須恵器杯身、11の須恵器短頸壺、12の須恵器広口壺が、第４トレンチ柱穴Ｐ－16から７の須恵器杯身が出土した。他の細片も含め、概して７世紀の所産と考えられる。

（５）弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には、後期の壺（１）、甕（２）、高杯（３・４）などがある。いずれも川ＳＤ01の近世堆積からの出土である。

７　まとめ

今回の調査では、激しい攪乱を受けていたとはいえ、弥生時代から古墳時代にかけて、それぞれに成果をあげることができた。江戸時代以後では、川ＳＤ01の検出がある。この川は、前項でも触れたように、当中学校造成前まで機能していた蓮ヶ糸川であり、溜め池の重箱池から用水路として引かれ、近代の農耕発展に欠かせない役割を担っていたと思われる。

鎌倉時代に関しては、集落の存在を具体的に示すことはできなかったが、円形柱穴が数基検出され、包含層からは13世紀頃の土器などが出土するなど、周辺部に広がる中世遺跡の範囲内にあることを再確認できた。

平安時代に関するものには、出土土器の中に浄瓶があり、近在する乙訓寺の関連が注目できる。また、長岡京跡に関しては、建物などの具体的な施設は示せなかったが、柱穴群の存在から、何らかの宅地利用があったことを知り得た。

古墳時代にあっては、終末期の竪穴住居を検出し、周辺部での成果もふまえて、６世紀から７世紀にかけての集落の居住区域であったこと示す成果があった。

弥生時代については、後期の土器が出土し、集落が周辺部へ広がることを示せた。

注１）安藤信策「長岡京域の発掘調査　２．今里遺跡」京都考古刊行会「京都考古」第５号　昭和49年　1974年
２）岩崎誠「右京第20次調査概要」長岡京市教育委員会　長岡京跡発掘調査研究所「長岡京市報告書」第12冊　1984年
３）岩崎誠「右京第701次調査概報」「長岡京市センター年報」平成13年度　2003年
４）中島哲夫「右京第399次調査概報」「長岡京市センター年報」平成４年度　1994年
５）中山修一「今里地区の略史」長岡京市教育委員会　長岡京跡発掘調査研究所「長岡京市報告書」第12冊　1984年
中尾秀正「乙訓寺瓦窯・乙訓寺」長岡京市史編さん委員会「長岡京市史」資料編一1991年　他

図　　版

（1）調査区全景（南西から）

（2）調査区全景（南東から）

（1）調査区全景（北西から）

（2）第1トレンチ全景（南から）

（1）第２トレンチ全景（北西から）

（2）第２トレンチ全景（南から）

（1）第３トレンチ全景（北東から）

（2）第３トレンチ全景（北西から）

（1）第３トレンチ検出川ＳＤ01と柱穴群（南東から）

（2）第３トレンチ検出川ＳＤ01（東から）

（1）第３トレンチ検出溝ＳＤ03（南西から）

（2）第３トレンチ検出溝ＳＤ03および東柱穴群（南から）

（1）第３トレンチ西端部の柱穴群（南東から）

（2）第４トレンチ南部検出の竪穴住居ＳＨ05（西から）

（1）第４トレンチ全景（北から）

（2）第４トレンチ全景（南西から）

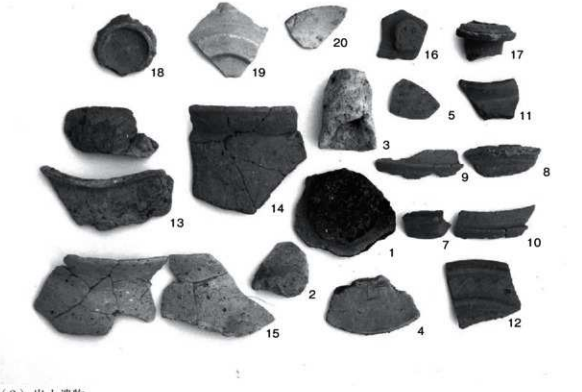
（1）第４トレンチ検出川ＳＤ01（北西から）

（2）第４トレンチ中央部検出の竪穴住居ＳＨ06（西から）

（1）竪穴住居ＳＨ06カマド（北から）

（2）竪穴住居ＳＨ06カマド（南から）

（1）第3トレンチ調査風景（西から）



（2）出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい966じはっくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡右京第966次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第５１集
編著者名	岩崎　誠
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10－１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡	長岡京市	26209	107	34°56′6″	135°41′27″	20090401 ～ 20090709	435㎡	体育館改築
今里遺跡	今里五丁目		32					
井ノ内遺跡	20－１		15					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡	都域	平安時代	柱穴群	土師器、須恵器	攪乱激しく、建物等の性格不明。 古墳時代後期の居住区域内にあることを確認。 平安時代では、浄瓶の出土が特筆され、近在する乙訓寺との関連が想起できる。
今里遺跡 井ノ内遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	包含層 竪穴住居 柱穴群 柱穴群	弥生土器 須恵器、土師器 土師器、須恵器 土師器、瓦器、陶磁器	

長岡京市埋蔵文化財調査報告書　第51集

平成21（2009）年９月29日　印刷
平成21（2009）年９月30日　発行

編集発行　財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622　FAX　075－951－0427
印　　刷　株式会社 同朋舎
〒602－0062　京都市下京区中堂寺鍵田町２
電話　075－361－9121　FAX　075－371－0666